

仙山線の思い出

平成七年に愛子に居を構えてから二十年が経とうとしている。マイカーを所有しておらず、利用する交通機関は仙山線を走る列車である。乗り降りする駅は愛子駅。

この愛子駅が平成十三年十二月七日、にわかには日本中の耳目を集めたことがある。皇太子夫妻の間に誕生した子が「愛子」様と名付けられるやいなや愛子駅に人が押し寄せ、当日の日付入り切符を買い求めたのである。駅前には長蛇の列、あんなに賑わいを見せた愛子駅は後にも先にもないと思う。

最初から「愛子」を「あやし」と読める人は数少ない。子を愛おしむのなら、親を愛おしむ駅名があってもよさそうだが、これがあった。北海道の室蘭本線にある「母恋」という駅だ。めずらしい駅名を探すのもなかなか面白い。そういえば「面白山」駅も仙山線にあり、かつては「面白山仮乗降場」の駅名で日本一長い駅名だったようだ。

愛子駅を起点に勤務先が仙台市内にあったとき、山形市内にあったとき、そして仕事をリタイアした今でも仙山線に乗り続けているのだから、生涯で一番乗っているJR線が仙山線ということになる。仙山線の魅力はといえば、めぐる季節の移ろいが車窓から見事にとらえられるということだろう。

とりわけ山形に通勤してきたときにはピンク色の桜が奏でる春爛漫、初夏の陽光に息づく樹や花、パッチワークのようなあでやかな紅葉、冬のモノクロ世界の幽玄な山寺、乗るほどにその魅力は尽きず、居ながらにして違う季節への旅を楽しませてくれたものだ。

人生という名の列車もたそがれに差しかかってきた。そんな感慨を胸に、眺める仙山線からの季節の移ろいはどんなふうに映るのだろう。秋の空に舞う枯葉に、わが身を重ねたりするのだろうか……。それもまた自然の恵み、人生を感じさせてくれる仙山線に感謝だ。